今月の視点－156

大学入試 “超安全志向”の裏側で 指定校からの入学者が増加！

私立大学、指定校からの推薦入学者が 2 割超。 入試方式別 入学者数の調査［旺文社］で判明

旺文社 教育情報センター 2019 年 12 月 10 日

旺文社では『大学の真の実力 情報公開 BOOK』（毎年 9 月末発行）の刊行にあたり、全国の大学に、「大学の情報の公表に伴う調査」として、さまざまなアンケートを依頼、多数の大学より回答を頂戴している。そのうち、入学者に関する調査では 1 年次入学者の総数に加えて、入試方式別の入学者数も調査している。本稿では、本調査データならびに文部科学省資料を基に、私立大学入学者の実情の一端に触れたい。

※本稿で示すデータは、特記のない場合は「国公私立大学入学者選抜実施状況/文部科学省」による。

●私立大学入学者の概況

――入試方式別の入学者は「一般入試」と「推薦入試＋AO 入試」が半々

大学入試の入試方式は、大きく 3 つに分けられる。一般入試（センター試験利用入試を含む）、推薦入試、AO 入試だ。いまから 19 年前、2000 年の私立大学入学者に占める、一般入試を経ての入学者は 60.1%を占めていた。時を経るとともに、推薦・AO 入試の実施は増加の一途をたどった。図表 1 に示した通り、私立大学全体の大学・学部数の増加につれ推薦入試の実施は増加、加えて AO 入試の実施大学・学部数は爆発的に拡大した。入試の多様化が推進された結果、2007 年には「一般入試での入学者」と「推薦＋AO 入試での入学者」の割合が逆転。以降、その割合は、おおよそ半々で推移していたが、2017 年入試「一般＝48.5%」「推薦＋AO＝51.2%」、2018 年入試「一般＝47.3%」「推薦＋AO＝52.4%」と推薦・AO 入試の割合が拡大している。

［図表1］ 私立大学 推薦・AO入試の実施大学・学部数

	2000年入試		2018年入試
入試を実施した大学・学部数	475大学・1,194学部		584大学・1,785学部
うち、推薦入試を実施	468大学・1,137学部	⇒	582大学・1,769学部
うち、AO入試を実施	71大学・148学部		482大学・1,334学部

(c)2019 旺文社 教育情報センター

ここまでで記した推薦入試のデータは、公募制推薦、指定校制推薦、付属校・系列校推薦などを含む全ての推薦入試の全体値であり、その内訳は、文部科学省資料では示されていない。次項では旺文社調査による推薦入試の内訳を見ていく。

●指定校からの入学者の割合が増加！ ――強固な安全志向を生み出した 2 つの不安

冒頭に記した通り、旺文社による「大学の情報の公表に伴う調査」では、1 年次入学者の総数に加えて、入試方式別の入学者数を集約している。各大学からの回答のうち、入学者総数と入試方式別の入学者数の合計が一致した有効回答をまとめたのが図表 2 だ。文部科学省資料による、私立大学入学者総数に対して、本調査のカバー率は 80%を超えており、私立大学入学者の全体的な傾向には触れられよう。

図表 2 で示した入学者の割合を見ると、公募制推薦は 2014 年以降の 6 年間、11%強で一定の推移を示している。この間、継続して、公募制推薦の方式や日程は多様化、複線化したが、この割合だ。対して、指定校制は 18%ほどだった割合が、20%を超えるほどに増加。2019 年の推薦入試での入学者数（162,171 人［有効回答集計］）を母数とした場合、その内訳は「公募制 28.3%、指定校制 53.5%、付属校・系列校 18.2%」となり、推薦入試のメインは、指定校制といえよう。推薦・AO 入試での入学者の増加は入試の多様化を受けての結果であるとともに、「早く確実に合格したい」という受験生や保護者の安全志向の裏返しでもある。この安全志向は長く続く傾向だが、ここ数年その志向に拍車がかかっている。

もっとも大きな要因は、2016 年入試から行われている“入学定員管理の厳格化”への不安だろう。都市部に多く所在する大・中規模大学への学生の集中を抑制するために、大・中規模大学を中心に合格者が絞り込まれた。「これまでだったら合格できた学力の生徒が、多数不合格になった」と話す高校の先生は少なくない。弾き出された受験生は、併願校に流れていくこととなるが、併願校にも多くの志願者が集中し、かえって難化した大学もある。

［図表2］私立大学 入試方式別 入学者の割合の推移

※旺文社「大学の情報の公表に伴う調査」より算出

	1年次入学者数（人）※有効回答集計分	入試方式別　入学者の割合					
		一般入試	公募制推薦入試	指定校制推薦入試	付属校・系列校推薦入試	AO入試	その他
2014年	398,177	49.8%	11.4%	18.2%	7.0%	9.3%	4.4%
2015年	398,793	49.4%	11.3%	18.4%	6.9%	9.2%	4.7%
2016年	406,912	49.0%	11.5%	18.6%	6.8%	9.4%	4.6%
2017年	412,526	47.8%	11.8%	18.7%	6.6%	10.0%	5.1%
2018年	419,108	46.8%	11.5%	19.1%	6.9%	10.4%	5.3%
2019年	419,059	45.4%	11.0%	20.7%	7.1%	10.6%	5.2%

※一般入試にセンター試験利用入試を含む。
※その他には大学の入試分類により、社会人入試、外国人対象の入試やスポーツ推薦を含んでいる場合がある。そのため、他の推薦入試の割合が、低めに出る傾向がある。
※有効回答大学・学部数：2014年＝459大学1,372学部／2015年＝458大学1,377学部／2016年＝476大学1,431学部／2017年＝479大学1,475学部／2018年＝477大学1,507学部／2019年＝479大学1,532学部。
※大学により、入試方式別の入学者数の回答に際して、「公募制と指定校制の合算で回答」「AOと付属校・系列校の合算で回答」「指定校制と付属校・系列校は非公表」などのケースがある。入学者総数と、入試方式別の入学者数の合計が一致しない場合、入試方式別の明細がない場合は、集計から除いている。

(c)2019 旺文社 教育情報センター

［図表3］私立大学 募集人員と入学者数の推移

（人）

	総合計			うち、一般入試		
	募集人員	入学者数	入学者数－募集人員	募集人員	入学者数	入学者数－募集人員
2014年	454,334	469,165	14,831	255,959	232,867	−23,092
2015年	458,897	477,727	18,830	259,992	234,172	−25,820
2016年	461,016	478,320	17,304	261,703	234,331	−27,372
2017年	471,256	486,857	15,601	267,804	236,096	−31,708
2018年	478,001	483,622	5,621	271,548	228,967	−42,581

図表 3 は、私立大学の募集人員と入学者数の推移、あわせて募集人員に対する入学者数の過欠員をまとめたものだ（文部科学省資料）。総合計を見ると、募集人員に対して入学者数が超過しており、全体として大学は入学者を確保しているとわかる。一方、一般入試を見ると、募集人員に対して入学者数は不足している。総合計、一般入試とも、2016 年から 2018 年にかけては、過欠員の数値の変化が顕著になっている。このデータからも、一般入試以外での入学者が急増していると読み取ることができよう。

安全志向を強めたもう 1 つの要因は「入試改革」だ。2019 年以前の受験生は、たとえ浪人することになったとしても、多浪しない限りは 2020 年度から始まる「入試改革」には、直接は関係しない。とはいえ、やはり、大きな変化を目の前にして、得も言われぬ不安から安全志向が広まったとしても何ら不思議ではない。

◆　◆　◆

2016 年以降、受験生や保護者は“超安全志向”となった。「かつては、難関上位大学でも指定校の枠が余ることがあったのですが、この 1、2 年は埋まります」「生徒本人との面談では、一般入試での合格を目指して最後まで頑張ろうと話をしたのですが、その後、保護者の強い意向で、指定校制推薦の出願締切日当日に、やっぱり指定校で、といったケースもありました」「保護者から指定校の問い合わせが増えています」などという話は、高校の先生方から多く聞こえてくる。

指定校制推薦は、より早く確実に合格を狙える入試の筆頭だ。これまでは、“入学定員管理の厳格化”の影響を主とした安全志向といえるが、2020 年入試からは「入試改革」への不安も影響を強めてくる。入試が重量化すればするほど、不安があればあるほど、安全志向は強まる。今回、旺文社調査で判明した指定校からの入学者の増加傾向は、そうした実情の一端を示すものといえよう。

（2019. 12 加納）

(c)2019 旺文社 教育情報センター